

ネコの存在

上條優子

「マヤはね、道の向こうをネコが通るのを見ただけで、“怖いッ”と言って、わたしにしがみつこうな子だったんですよ。

それが、この頃は、“ただいまッ”って帰ってくるなり、ツン太がどうした、こうした、夕ご飯のときも、身振り手振りを交えてツン太の話ばかりで、主人が、あのマヤが、変われば変わったものだ、あきれているんですよ。

それから、マヤと妹のナオとでよく『塾ごっこ』をやるんですけど、ええ、マヤが先生役で、ナオが生徒役で、そしてね、そこに必ずツン太がいるんです。ツン太といっても動物のぬいぐるみなんですけどね。ええ、ネコとは限らないんです。とにかく動物のぬいぐるみなんですよ。マヤなんか先生の口調そっくりで、ナオもしおらしい生徒振りで、見ている方が吹き出しなくなるくらいなんです。ところがね、マヤもナオも、そばにいるツン太には何も働きかけないし、動かそうともしないんです。

わたし、そのことに気がついてから、いったいこの子たちの『塾ごっこ』でのツン太の役割は何なんだろうって、不思議に思えてきて、それで、いろいろと考えてみたんです。そして出した結論は、ツン太の役割は、そこに存在する—『塾ごっこ』遊びの中で何もし

ないけれどもそこに在らねばならないもの、欠けてはいけないものがツン太の役割なんだってことなんです。

それでも思わなければ、あのツン太の存在は理解不能です。」

これはある日、マヤちゃんのお母さんが、わたしにしてくださったお話です。

マヤちゃんは、お父さんの転勤で東京の学校へ転校して行きました。もう六年生で、今は私立中学校の受験勉強で毎日が精一杯でしょう。ナオちゃんも三年生です。ですからもうぬいぐるみのツン太を横に座らせての『塾ごっこ』もしないでしょう。けれど、もうネコを怖がることはないでしょう。

それにしても、我家にはほかにもネコがいるというのに何故、ツン太だけがそこに存在していたのでしょうか—それだけツン太には存在感があるということなのでしょうかね。

◎ツン太=我家の最長老の黒ネコのことで。



こんにちは。「タマのともだち」です。

タマのともだち 佐藤美恵子 高橋善枝

私たち「タマのともだち」では、昨年（平成14年1月～12月）の1年間に、不妊手術のため依頼を受けて捕獲した野良猫の数は、18匹（一昨年の約2倍）、捕獲を始めた平成11年からこれまで合計48匹となり、捕獲の数は、年々増えています。また、「野良猫が来て花壇にフンをして困る」、「自宅の物置やガレージに子猫を生んでしまっているがどうしたらいいか」などの相談も同じように増えています。

捕獲や相談が増えた原因の一つに「ただエサをあげるだけ」という無責任な行為で野良猫を増やしているひとがいることがあげられます。最初は、『カワイソウだから』とか『寂しいから』という気持ちでエサをあげてしまい、気付いた時には何匹にもなっていた。そんなケースが多いような気がします。

エサをあげているのであれば、世話をしているという事をきちんと意識し、避妊・去勢手術をさせることはもちろん、近所とのトラブルが起きないように、糞の始末、残ったエサの片付けなどを行う覚悟でエサをあげてほしいものです。

野良猫の捕獲は、何匹もまとめてというわけにはいきません。警戒心の強い野良猫たちを確実に捕獲するには一度（1日）に2匹までが限度です。たとえば、

10匹の捕獲の依頼が来たときは、2匹ずつとしても最低5回（5日）かかるわけです。野良猫を捕獲した時、いつもホッとした気持ちと反面、とてもやるせない気持ちになります。

皆で、不幸な猫を減らすにはどうしたらいいか、猫と人がうまく付き合っていくにはどうしたらいいかを考えていきましょう。

「かわいそうだから」だけけでいいの？

